子育て支援の時代におけるペスタロッチーの意義について
―『隠者の夕暮』における「家庭生活」をめぐって―

近畿大学九州短期大学
町田福祉保育専門学校
こども保育学科（昼・夜）
学科長　駒木根　剛

１．子育て支援に関連する問い

「教育」に関連する我が国の今日的な課題の１つは、「子育て支援」を押し進めていくことである。それによって、男女共同参画社会を実現し、少子高齢化社会へ対応していくことや、少子化に歯止めをかけていくことが目指されている。少子化によって労働人口が減少していく中で、女性の社会進出によってそれを補いつつ、かつ、支えていかなければいけないという事情から、「子育て支援」は今後もいっそう進められていかなければならないのである。

「子育て」は、これまでは家族が支えるものであったが（あるいは、そう思われてきたが)、これからは、それを「子育て支援」の名のもとに、社会全体のシステムで支えていこう、というのである。それによって、また、女性の就労が可能になっていくのである。

ところが、「子育て支援」の名のもとに進められている、社会システムの構築は、今日のコンピューターに喩えるならば、ハードウェアーの部分に当たるものであり、ソフトウェアーの部分に当たるものではない。それがいかに合理的なものに発展していこうとも、それによって、「子育て」の質的なものがより良いものになっていく、ということではない。それらは、もともと議論の次元が異なっているのである。すなわち、ソフトウェアーの部分に当たる「子育て支援」についてもまた、議論されなければならないであろう。

とくに、待機児童の解消や、夜遅くまでの延長保育、一時的な預かり保育、また、学童保育といったものは、ともすれば、「家庭生活」の時間を奪ってしまい、かえって、「子育て支援」ならぬ「子育て丸投げ」の支援になりかねない、という側面もあると言えるであろう。「子育て」において「家庭生活」が重要であるということ、このことは、社会システムの構築においても、配慮されなければならない事柄である。

しかしながら、今日の「子育て支援」によって、今後、いっそう「家庭生活」の負担は軽減されていくのであり、そうした意味において、今日の「子育て支援」は、「親支援」ではあるが、これまで幼稚園で進められてきたような「親育ち」の理念とは、まさに正反対のベクトルの動きであると言える。

例えば、本来の幼稚園の理念を大切にしている園では、あえて通園バスを導入せずに、親子で通園できるようにしたり、また、昼食を給食ではなく弁当にしたりすることで、母親が母親として育ち、「子育て」を大変ではあるが楽しいと言えるものにしようと配慮してきたのである。それに対して、今日の「子育て支援」では、まさにそれとは正反対に、親の代わりとなるように、通園に配慮したり、給食を提供できる調理室を完備した「こども

園」へと移行するようにしたりすることで、これまでの「親育ち」の機会も含めて、「子育て」の負担を省こうとしているのである。

そうした意味では、「子育て支援」においては、一方で、ハードウェアーの部分に当たる社会システムの構築において、「親支援」が進められていかなければならないのであるが、他方で、ソフトウェアーの部分に当たる議論においては、「親育ち」が検討されていかなければならないのである。つまり、ハードウェアーとソフトウェアーにおいて、正反対のベクトルの動きを内包しているという「矛盾」を、どう解決していくかということが、今後の「子育て支援」の課題でもあるのである。

そのためにも、「家庭生活」の重要性があらためて再確認されるような「根本的な議論」があって然るべきである。多くの側面が社会システムによって代替されることになるとしても、「家庭生活」において、決してないがしろにされてはならないものは何か、そのことが問われなければならないであろう。つまり、「家庭生活」の本質が問われなければならない。そのためにも、「目からウロコが落ちる」という表現があるが、まさにそのような想いで、私たち自身が認識を改めることができるような議論があって然るべきである。したがって、そもそも「家庭生活とは何か」ということが、本質的に問われなくてはならない。ここに、「子育て支援」に関連する哲学的な「問い」があると思われる。

本研究は、そもそも「家庭生活とは何か」という問題を、近代教育の父ペスタロッチーの不朽の名作と言われる『隠者の夕暮』を手がかりとして考察しようとするものである。周知の通り、ペスタロッチーによって書かれたこの初期の著作においては、「生活圏の思想」が登場するのであるが、この思想こそ、「家庭生活とは何か」についての、ペスタロッチーの解答であると言えよう。

「人間の家庭的関係こそ、自然の第一にして最も卓越した関係である」と、ペスタロッチーは述べている。

彼にあっては、子どもの生活圏は、「家庭生活」に始まり、そして、「職業生活」、「国民生活」へとしだいに同心円状に広がっていくと考えられている。こうした「家庭生活」を中心にした、同心円状に広がる生活圏の思想こそ、ペスタロッチーの「生活圏の思想」の基本的な枠組みである。

ただし、ペスタロッチーは、人間の本当の「浄福」というものは、その中心にある「家庭生活」においてこそ、享受されるのである、というのである。そこに、ペスタロッチーにとっての「真理」への道があるのである。

「あなたは自分の人生行路で、ありとあらゆる真理を使用できるわけではない。人がその境遇において、もっていたおかげで浄福を受けられるような知識の領域は狭い。そしてこの領域は、その人の身近なところ、彼の本質やもっと身近な関係から始まって、そこからだんだんと広がっていくのである。そしてその広がり方はいかなる場合にも、つねにあらゆる真理の浄福力のこの中心点に向かっているものでなければならないのである。」

ペスタロッチーにあっては、「つねにあらゆる真理の浄福力のこの中心点に向かって」と

いう方向が、「真理」への道として考えられており、したがって、子どもにとっては、日常生活の中心点である「家庭生活」へと、さらには、その「家庭生活」の中心点へと向かっていくことこそが、ここで言う、「浄福」がある、ということなのである。

ここにおいて、「家庭生活」が、人間を真に人間にするものである、ということ、このことが、まさに「真理」として、ペスタロッチーの『隠者の夕暮』において語られていることが読み取れるのである。もしも、「家庭生活」が欠けていたなら、人間は真に人間にはなり得ず、子どもは真に子どもになり得ない、ということが語られているのである。だからこそ、「家庭生活」が重要である、ということになるのである。

こうした考え方が、「家庭生活とは何か」という問いに対しての、ペスタロッチーの解答であると言える。それは、「原点に回帰する」という「真理」であり、「自分の中心点に戻る」という「真理」なのである。つまり、「原点回帰」の哲学なのである。

こうした形で「真理」を探究した人物としては、例えば、フランスの哲学者であるデカルトを挙げるべきであろう。彼は、「原点に回帰する」という形で、自分自身の内面を省察し、かの有名な言葉、「我、考える故に、我あり」という「真理」を見出したのであるからである。

否、むしろ、ここでは、ペスタロッチーが若き青年であったときに心酔した、思想家ルソーの名を挙げる方が、より適切であるだろう。ルソーもまた、「原点に回帰する」という形で、「自然に帰れ」と主張していた訳である。「理性」にではなく、「自然」に、人間の「本質」を見出した点において、第一に、それが疎外化された人間を本来的な人間へ回復させるという理由から、第二に、それが人間に内在する「発達のメカニズム」を象徴的に捉えているという理由から、教育学に与えた影響は、計り知れないものがあるのである。

しかしながら、私たちは、こうした次元の理解に留まるべきではないであろう。なぜなら、ペスタロッチーの真意は、もっとこの先に、この奥に、あるからである。

周知の通り、『隠者の夕暮』は、キリスト者であることを自認するペスタロッチーの、独自に深められたその信仰に基づいて、人間教育について、大胆に、簡潔な筆致で、語られたものである。

とくに、そこで語られている「生活圏の思想」は、本研究の課題である「家庭生活とは何か」という問題について、議論を深めるための、格好の手がかりを与えてくれるであろうと思われる。

ただし、この著作は、キリスト教文化圏の教育思想であり、したがって、ただちに我が国の文化圏に取り入れることができる、というものではない。私たちは、キリスト教と対峙しなければならないし、そこで語られていることを、冷静に分析しなければならないであろう。そうして、「キリスト教」という宗教の次元を超えた、普遍的で哲学的な「真理」を、そこに汲み取っていく、というのでなくてはならないであろう。

本研究は、ペスタロッチーの教育思想を手がかりとして、「子育て支援」に関連する哲学的な「問い」として、そもそも「家庭生活とは何か」という問題を、より深い人間学的な

次元において浮き彫りにし、明らかにしようとするものである。

こうしたことから、本研究では、「家庭生活」に関して考察するとともに、そこに関係づけられているキリスト教の「信仰生活」について分析するという形で、ペスタロッチーの『隠者の夕暮』について、とくに「生活圏の思想」について、考察をすすめていく。

もとより、教育思想研究は、温故知新の学である。今日的な問題に対して、具体的な解決方法として、「意識改革」を提示することがその使命であろう。今日の「子育て支援」において、「家庭生活」の多くの側面が社会システムによって代替されることになるとしても、決してないがしろにされてはならないものは何か。本研究では、そのことを明らかにしていく。

２．これまでの先行研究について

先行研究についてはあまたのものがあるが、現段階では、その全てに目を通すことは出来ていない。今後の継続的な取り組みとする。ここでは、とくに踏まえるべきドイツ語圏での諸研究について（その邦訳のあるものについて）、ある程度、整理しておくことにしたい。これまで『隠者の夕暮』がどのように解釈されてきたのか、そのことを主要な関心事として整理しておきたい。

ドイツ語圏での諸研究について言えば、大きく分けて、二つのスタイルに分類できると思われる。１つは、伝記的な形で、ペスタロッチーの著作や実践を解説する、というスタイルをとっているものである。もう１つは、何らかの原理的な枠組みを明らかにしようと試みているものであり、内容を再構成して解説している、というスタイルをとっているものである。

前者のものとしては、例えば、K・ジルバーや、O・ボルデマン、M・リートケらの諸研究がある。後者のものとしては、P・ナトルプ、E・シュプランガー、H・ロートらの諸研究がある。

上記の著者の邦訳書は、以下の通りである。

① K・ジルバー著、松田義哲訳、『ペスタロッチー＜人間とその事業＞』、株式会社ぎょうせい、1977 年。
② O・ボルデマン著、松田義哲訳、『ペスタロッチー』、明治図書、1980 年。
③ M・リートケ著、長尾十三二・福田弘訳、『ペスタロッチ』、理想社、1985 年。
④ P・ナトルプ著、乙訓稔訳、『ペスタロッチ―その生涯と理念―』、東信堂、2000 年。
⑤ E・シュプランガー著、吉本均訳、『教育の思考形式』、明治図書、1962 年。
⑥ H・ロート著、『ペスタロッチーの人間像』、玉川大学出版部、1991 年。

前者のもの（①～③）について言えば、K・ジルバーと、O・ボルデマンの著作については、松田義哲が邦訳書を出版している。

K・ジルバーは、E・シュプランガーの弟子であり、イギリスの国籍を得て、エディンバラ大学でペスタロッチーを講義した女史である。また、O・ボルデマンは、旧東ドイツのペ

スタロッチー研究の重鎮であり、マルクス主義の立場からペスタロッチーを批判的に解釈したことで知られている。

松田氏は、彼等の邦訳によって、立場の異なる研究者の解釈を日本に伝えた、という点で、ペスタロッチー研究に貢献している。どのような視点から解釈するか、そのことによって、今後もペスタロッチー研究の方向性は多様である得ることが分かった。

また、M・リートケの著書『ペスタロッチ』は、伝記的に解説されたものであるが、訳者である、長尾十三二、福田弘らに、ペスタロッチーの生涯を語るための、基本的な枠組みを与えており、それだけに重要なものである。彼らの著書である『ペスタロッチ　人と思想』には、枠組みの類似性が認められるとともに、解釈の修正や、その後の研究成果が、施されている。

M・リートケは、『隠者の夕暮』においては、政治形態としては、かつての「家父長的な貴族制」が、ペスタロッチーによって信奉されており、家庭的関係や、神への信仰をその「モデル」としてはいるものの、そこには人間社会に関する見解の、旧時代的な、前近代的な制約ないし限界がある、ということを指摘している。それに対して、長尾十三二、福田弘らは、そのことについてはあまり強調してはいない。彼らの著書である『ペスタロッチ　人と思想』においては、『隠者の夕暮』の解釈は、家庭を中心とする生活圏の広がりと、その根底にあるキリスト教の精神とが、解説されているものとなっている。

また、M・リートケがペスタッロッチーの神への信仰を、宇宙の創造主としての父の父性に対する子どもの信仰であって、自然宗教的なものであるとしているのに対して、長尾十三二、福田弘らは、むしろ、宗教改革の精神、ツヴィングリの宗教性に近親性をもっているのであるとしている。

両者の見解には違いがあるが、いずれにしても、それはペスタロッチーの信仰をめぐってのものであり、「家庭生活」が「信仰生活」と不可分のものとして考えられているという点においては共通している。

後者のもの（④～⑥）としては、P・ナトルプの研究が、まずはじめに触れられなくてはならないであろう。比較的、最近に邦訳が出されたP・ナトルプの著書『ペスタロッチ　―その生涯と理念―』ではあるが、長く邦訳が出されてこなかったという事情とは裏腹に、ペスタロッチー研究においては、欠かすことのできない研究書として、以前からよく知られていたところのものである。

ナトルプは、ペスタロッチー教育学の根本原理として、「合自然性の原理」を挙げているのであるが、それは、５つの原理、すなわち、①「自発性の原理」②「方法の原理」③「直観の原理」④「能力均衡の原理」⑤「共同体の原理」によって、その全体像が理解されるような「１つ」の原理である、という。言い換えれば、①～⑤の原理は、教育の「合自然性」の原理についての、５つの契機、ないしは、側面であるというのである。

『隠者の夕暮』については、ナトルプは２つの点について言及している。１つは、職業陶冶は普遍的な人間陶冶のもとに必然的に従属する、ということであり、そもそも人間陶

冶の重要性をペスタロッチーは認識していたのである、というものである。もう１つは、人間陶冶の要件を、人間の「状況」や「境遇」や「環境」のうちに見出していた、ということである。ナトルプは、彼自身の社会的教育学の立場から、とくに共同体による社会化の原理を『隠者の夕暮』においても読み取ろうとしていたようである。彼は、とくにその点において、ペスタロッチーを賞賛していたのである。

それに対して、シュプランガーは、その著書『教育の思考形式』において、ナトルプとは全く異なるアプローチをしている。彼は、ペスタロッチーには２つの思想契機があるという。市民革命前の身分社会に即応する古いものと、市民革命後の新しいものとの、新旧２つの思考方向によって、ペスタロッチーの全思索は貫かれているのであるという。前者は「生活圏」の思想であり、後者は『人間の発達における自然の歩みについての我が探究』（以後、『探究』とする）における精神的「独立と自立」の原理である。

『隠者の夕暮』に関してのシュプランガーの見解は、３つの外的領域と１つの内的領域という枠組みのものである。家庭という第１の外的領域から、労働の場所という第２の外的領域に広がり、さらに国家と国民という第３の外的領域へと広がっていくという、外部に向かっていく「運動」があり、もう一方で、家庭へと向かっていく、内部に向かっていく「運動」があって、さらにその内奥において、神へと向かっていく、というものがあるというのである。この２つの「円環運動」によって、子どもが高まっていく、成長していく、という人間観について言及しているのである。

スイスの研究者である H・ロートは、その著書『ペスタロッチーの人間像』の中で、１つの章を割いて『隠者の夕暮』について考察をしている。彼は、『隠者の夕暮』と、その後のおよそ２０年後に公刊された『探究』とに、ペスタロッチーの創造的な精神の内に生じた人間像と、その後の広がりと深みとを読み取ることができる、と指摘している。

ロートによれば、『隠者の夕暮』は、その後の『探究』においてより深みをましたのであって、それ自体は、萌芽的なものであり、彼の思想の初期のものであるとも言えるという。「人間の自然のなかに存するように思える矛盾」は、『隠者の夕暮』においてもはっきり示されていた、という。ペスタロッチーの探究は、自分自身の内面に見出される「矛盾」との闘いであり、その解明と、その解決なのである。

「人間は、いかにあるべきか、そしていかにあり得るかというような仕方であるのではない。人間は、自然が賦与した家庭環境の幸福な世界から成長したのである。人間は幸福が見出されない時、むなしい享楽や多くの知識のなかに、そして自らの野心や快楽欲や権力欲を満たすと考えられる諸々の企てのなかにそれを求める。それにもかかわらず、内面的な安らぎが見出されることは全くない」と、ロートはペスタロッチーの見解にならって主張している。つまりは、内面的な安らぎがなくては、人は彷徨うばかりである、というのである。人間の成長・発達において欠かすことのできないものとして、「家庭生活」が位置づけられている、と言っていいであろう。

ロートは、「神は人類に最も近い関係である」との『隠者の夕暮』の中の一節をめぐる解

釈において、キリストの信仰に生きた、絶望の只中で希望に生きた、ペスタロッチーの人間観として、力強く論述している。このことが、訳者のあとがきで、長田新の解釈との違いとして言及されているのであるが、そこでは、長田新の解釈は、永遠の命に連なるという、宗教一般の次元から解釈したものとして紹介されている。

長田新は、次のように解釈していると紹介されている。

「･･･惟ふに神は吾々の生命の本質から内包的に考へて見ると生命の全体の連続・全体の統一の中心点であって、制約された一切の個々物に先行する。･･･抽象的に考察すると最も遠くあるかのように思はれる神が、吾々の具体的な生命的意識には最も近い関係でなくてはならない。「神は人類に最も近い関係である」といふペスタロッチーの言葉を人はこのように内包的拡充の意味に解さなくてはならない。」(『宗教と教育』、福村書店、89～90 頁)

私見になるが、上記の言葉から解するに、長田新は、人間の連続的な成長観との関わりの中で宗教を理解しており、永遠なる命に連なる人間の命という形で、「宗教的な生」をペスタロッチーの人間観に見出しているようである。

それに対して、H・ロートは、「宗教的な実存」において、ペスタロッチーの人間観を読み取っており、そこには、M・ブーバーが述べた「我と汝」の関係性における「実存」と同様のものが、見出されていると考えられる。

３．ペスタロッチーのレトリック、生きていくうえで「心の支え」を得ることの大切さ

『隠者の夕暮』の冒頭にある、あの有名な言葉を引用したい。

「神の親心、人間の子心」

意味深長な言葉である。何かがそこに語られている、と感じられてくる。何か、そこに「真理」があるかのように思われてくる。一体、これは何なのだろうか。

これはキリスト教で用いられることの多い「メタファー」(隠喩)の手法(レトリック、語り方)であると考えられる。

例えば、キリスト教徒でもあった、パスカルの言葉が有名である。

「人間は考える葦である」

実際には、次のような論理が成り立っている。

「人間は考える葦であるが、人間は考える葦ではない。」

ここでは、A=B かつ A≠B という論理が成り立っている。つまり、A=B かつ A≠B という論理が成り立つのがメタファー(隠喩)である。

他に例えば、イエス・キリストの言葉として、次のようなものがある。

「わたしは、ぶどうの木で、あなたがたは枝です。」

実際には、次のような論理が成り立っている。

「わたしはぶどうの木であるが、わたしはぶどうの木ではない。」

(A=B かつ A≠B という論理)

「あなたがたは枝であるが、あなたがたは枝ではない。」

（A=B かつ A≠B という論理）

つまり、こうした形で語ることで、そこに何か「真理」が秘められているかのような印象を与えているのである。

では、ペスタロッチーの言葉は、どうであろうか。

「神の親心、人間の子心」

これは、「教会」という生活共同体において語られることの多い、神の愛（人間に対する神の愛）と、人間の信仰（人間の神への愛）とが語られていると同時に、次の事柄についても語られている言葉である。

それは、「家庭」という生活共同体において語られるであろう、親の親心（子どもへの愛）と、子どもの子心（親への愛）とである。

つまり、次のような論理が成り立っていると言える。

「神の愛は親の親心であるが、神の愛は親の親心ではない。」

（A=B かつ A≠B という論理）

「人間の信仰は子どもの子心であるが、人間の信仰は子どもの子心ではない。」

（A=B かつ A≠B という論理）

ペスタロッチーのいう「親心」（Vatersinn）と「子心」（Kindersinn）とは何か、という問題が、ここで浮かび上がってくる。本来的には、Vatersinn という単語は「父心」と訳すべきところであるが、ペスタロッチーの後の立場、すなわち、『リーンハルトとゲルトルート』における母親の役割を重要視する立場から、「親心」と訳出することが一般的になっているのであるが、それでも、やはり、キリスト教における、父と子の関係性を意識している言葉であることは間違いないことであることから、ここでは「父心」の側面を重要視することにしてみたい。

このことについて考えていくにあたって、新約聖書の中から、理解を助けると思われる箇所を、引用することにしてみたい。

≪イエス、マグダラのマリアに現れる≫と題される、イエスが十字架刑に処された後の死後に復活して人々の前に現れた、というくだりの箇所である。

「マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」こう言いながら後ろを振り向くと、イエスのたっておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。

まだ父のもとへ上っていないのだから。私の兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、私の神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。」（ヨハネによる福音書２０章１１節～１８節）

この箇所では、次のことが明らかになっている。キリスト教においては、神とその御子イエスとが、父と子の関係性であると同時に、神と人間とも、父と子の関係性になっている、ということである。

こうしたことから言えば、もともと、キリスト教には、このような関係性についての考え方があった、ということになるのであるが、それでもなお、ペスタロッチーにさらなる意味があるとすれば、それは、次のような言葉においてであろう。

「母の乳によって満ち足りている乳児は、この真理の道によって、彼にとって母親が何であるかを学び、そしてこの真理への道は、この幼き者が、まだ義務とか感謝とかいった言葉を口にすることができない段階ですでに、彼の心のうちに感謝の本質である愛の心を生じさせる。また父親の分けてくれるパンを食べながら、父親といっしょに暖炉で身を暖めている男の子は、同じくこのような自然の道によって、子としての義務を行うことに自分の本当の幸せがあることを知る。」

ペスタロッチーは、「家庭」という生活共同体における、父と子（親と子）の関係性をよりいっそう重要視しているのである。「教会」という生活共同体における、父と子との関係性よりも、ずっと以前に、自然が人間に与えてくれる第一のものとして、こうした関係性を重要視しているのである。

そこには、何があるのか。ペスタロッチーは、人が生きていくためには、「心の支え」が必要である、ということに気づいていたのであろう。生きていくうえで必要な「心の支え」が、そうした「家庭」における、父と子（親と子）の関係性であることに気付いていたのである。

子どもは、親との関係性を「心の支え」にしている。それが揺らぐとき、子どもは深い「心の傷」を抱え込んでしまう。心の中に「風穴」があいてしまうのである。

「家庭生活」の中心点には、父と子（親と子）の関係性があるのである。そして、それは、子どもにとって「心の支え」になっているのである。

しかしながら、現実の「家庭生活」は、そして、現実の「家庭的関係」は、そのような絵に描いたような理想的なものではない。

確かに、安定しているときは、子どもにとっては揺るぎない拠り所となるけれども、しかしながら、現実には、「家庭生活」は、とても不安定で、脆く、壊れやすいものでもある。「家庭生活」は、経済的に行き詰まることもあれば、両親が離婚することもある。また、子どもが、父親・母親のいずれかと死別することすらもあり得る。その子どもが幼い頃から片親のこともあれば、血のつながらない親や、義理の兄弟、姉妹との関係が当たり前と

いう場合もあるであろう。精神疾患をもった母親もいれば、児童虐待、暴力を繰り返す父親もいる。

こうしたことから言えば、確かに、理想的にいえば、「家庭的関係」は自然に与えられる最初の関係ではあるが、そして、子どもにとって揺るぎない拠り所に思えるものであるが、現実的に言えば、決してそうではない。

この関係を支えるもっと根源的な、決して揺らぐことの無い関係性が、要請されてくるのである。絶対的に揺らぐことの無い拠り所が、「家庭生活」、「家庭的関係」の土台として要請されてくるのである。信頼できるもの、決して信頼が損なわれることの無いものとして、人間的なものを越えた存在としての、創造主としての神がペスタロッチーにあっては要請されてくるのである。

「信頼」と「愛」とが、決して揺らぐことの無い拠り所、そこに、ペスタロッチーは、キリスト教の父と子の関係性を据えているのである。

「揺らぐことの無い家庭的関係」、「揺らぐことのない家庭生活」として、キリスト教が考えられているのであり、受け止められているのである。拡大解釈をすれば、ペスタロッチーにあっては、「信仰生活」もまた、神と人間との「家庭生活」なのである。その生活は、「家庭生活」の土台となる「揺らぐことのない家庭生活」となっているのである。

子どもには、生きていくうえでの「心の支え」が必要である。子どもが「心の支え」を得ることが出来るようにすること、そのことが大切である。そうした「心の支え」が、「家庭生活」における、その中心点としての、父と子（親と子）の関係性であるということを、ペスタロッチーは彼の哲学において『隠者の夕暮』において見出している、と言えるであろう。

【参考文献】

１）K・ジルバー著、松田義哲訳、『ペスタロッチー＜人間とその事業＞』、株式会社ぎょうせい、1977 年。
２）O・ボルデマン著、松田義哲訳、『ペスタロッチー』、明治図書、1980 年。
３）M・リートケ著、長尾十三二・福田弘訳、『ペスタロッチ』、理想社、1985 年。
４）P・ナトルプ著、乙訓稔訳、『ペスタロッチ―その生涯と理念―』、東信堂、2000 年。
５）E・シュプランガー著、吉本均訳、『教育の思考形式』、明治図書、1962 年。
６）H・ロート著、『ペスタロッチーの人間像』、玉川大学出版部、1991 年。

注１　『隠者の夕暮』を題目の中に含む日本の研究論文は、２３件あったが、まだ、その一部しか参照できていない。（タイトルに限定した場合に、２３件ということである。）

注２　『隠者の夕暮』の邦訳は、玉川大学出版部から出されているものを主に参照している。ドイツ語の原書は、Dr. Mitsuo Kodama 編集によるものを取り寄せ、参照している。

注３　本原稿は、研究発表後に同席された先生方のご意見を参考に若干の推敲を加えたものである。父性・母性の問題、キリスト教の解釈・文献の問題は、未解決のままである。